

【いばらの冠】(受難物語講解説教・第20回より) 牧師・熊谷徹

『マルコの福音書』15章15節；「それで、ピラトは群衆のきげんをとろうと思い、バラバを釈放した。そして、イエスをむち打って後、十字架につけるようにと引き渡した」。最後の言葉「引き渡した」は「兵士達に引き渡した」ということである。この兵士達は、地中海の海岸都市カイザリヤからピラトを護衛するためにエルサレムに来ていた。彼らはピラトの命令を受けて、イエスを総督官邸に連行した。16節；「兵士たちはイエスを、邸宅、すなわち総督官邸の中に連れて行き、全部隊を呼び集めた。」。総督官邸はエルサレム神殿の北西に接するアントニア要塞の中にあつた。そこには兵士達の宿舎もあつた。総督付きの部隊(speira)は300人から600人の兵士で編成された。「全部隊を呼び集めた」とあるのは、ピラトが群衆が暴動を起こすことを警戒していたことを物語っている。兵士達は暇つぶしに「ユダヤ人の王」を愚弄する戴冠式を始めた。17節；「そしてイエスに紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ、…」。「紫の衣を着せた」とは、王の格好をさせたということである。勿論本物の「紫の衣」を着せたわけではない。兵士の汚れた服を着せたのである。兵士の赤い服が着古されて汚れると紫がかって見える。次に兵士達は「いばらの冠を編んでかぶらせ」た。これはローマ帝国の皇帝や将軍が凱旋する時に被った勝利の冠、月桂冠の真似である。勝利の冠、栄光の冠である月桂冠ならぬ敗北の冠、屈辱の冠であるいばらの冠を被せて主イエスを愚弄したのである。

殉教者ヤン・フス(1369-1415)が被らされたのは「紙の冠」であつたが、キリストが被らされたのは「いばらで編んだ冠」である。(中略)鋭く尖つた棘は主の額と頭に突き刺さり、血が流れ落ちた。19節には「葦の棒でイエスの頭をたたいたり、つばきをかけたりした」とある。「葦の棒で叩かれた」主イエスの頭には茨が更に深く突き刺さつた。流れ落ちる血潮は兵士達が「吐きかけるつばき」と入り混じって主イエスの顔を醜いものに変えた。「血潮したたる」という讚美歌はこの主イエスの姿を歌つたものである。ゲルハルトはこう歌う；「血潮したたる主の御頭、棘に刺されし主のみかしら、なやみと恥じにやつれし主を、われはかしこみ、君と仰ぐ」(由木康訳)。(中略)サザーランドが描いた「いばらの頭」には主イエスの顔が描かれていない。この時の主イエスの顔を描くことは不可能だと思つたからかも知れない。彼の絵を見た人はそれぞれに「茨の冠」を被つた主イエスの顔を想像する。(中略)彼は「茨の冠」だけを描くことで、見る人がそれぞれのキリストを思い浮かべてくれれば良いと思つたのだろう。あなたはどうか。あなたにとって茨の冠を被つたキリストのお顔はどのようなお顔であろうか。茨の冠をかぶつたキリストのまなざしはあなたに向けられているのだということを知っているだろうか。◇